

『がん哲学・外来』～『生物学の法則』・『人間学の法則』～

2026年5月7日 筆者は、早朝【第3322回東京国際朝祷会式 in お茶の水クリスチャン・センター (OCC)】での講演『わたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。』（ヨハネによる福音書6章37節）に赴いた。多数の参加者であった。その後、朝食会に参加した。『がん哲学』&『がん哲学外来』の起源（添付）についてなどなど複数の質問も寄せられた。

【『がん細胞の病理』と『人間社会の病理』の類似性が、2001年の『がん哲学』の提唱の原点である。つまり、『がんは生物学の法則』+『哲学は人間学の法則』=『がん哲学』である。そして、2008年 順天堂大学病院で『病氣』であっても『病人』ではない社会の構築を目指して『がん哲学外来』（添付）が開設された。】とさりげなく語った。

【『外来』との言葉が入っているが、病院の専門外来ではなく、診察券も必要がない。治療であるカウンセリングとも異なり、医師が患者やその家族の悩みを聞き、同じ目線に立って“対話”をする場。悩みの『解決』ではなく『解消』することが目的である。対話により、その人の中での悩みの優先順位が下がれば、それを問わなくなるそれを『解消』と呼ぶ。】

【2005年にアスベストを原因とする中皮腫患者専門の外来を順天堂大学病院で担当した。難治を悩む患者が多いことを受け、主治医と患者の隙間を埋める役割の必要性を感じた。『がん哲学外来』は『空っぽの器』のようなもので、『どんなに水を入れても 底が抜けない空の器を用意して、丈夫な器さえあれば、何を話してもいい。』】と話した。『出会いの流れ』を痛感する日々である。

また、筆者の無医村の出身地 島根県出雲大社鷓峠と『稲葉の白兔』（添付）の話もした。『心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、— 愛せよ！』、さらに『わたしの隣り人とは だれのことですか』の貴重な復学な時となった。

千葉大学医学部の学生とお母様も参加されていた。まさに、『喜んで無邪気に 小さなことに 大きな愛を込める』の実践である。大変有意義な充実した時となった。

その後、『順天堂大学医学部腫瘍・病理学教室』により、『新渡戸稲造記念センター』に向かった。『3連チャン症候群の1日』となった。

